

キリシタン版の「正誤表」について

千葉軒士(中部大学)

要旨

日本の中世キリシタン版には「正誤表」が付されるものがある。この「正誤表」が付される各本を精査し、当時の印刷状況も踏まえると、キリシタン版に付される「正誤表」は印刷の版面担当者が作成したもので、本文作成者(編者)が作成したものとは言い難い。このキリシタン版の「正誤表」は該当文献の全範囲を訂正の対象としておらず、印刷の都合上、「正誤表」と同じ折で組版されたページの本文については、「正誤表」に項目が表れない。ここから、キリシタン版の「正誤表」は、印刷完了後に付されたのではなく、本文印刷と同時に作成されたと考えられる。また、キリシタン版の本文は、誤植があれば修正し、刷り直すことがあるが、「正誤表」自体は修正しない可能性がある。さらに、「正誤表」は本文内すべてのあやまりを含むものではなく、あくまでも版面担当者が気づいた誤植が記載されたものである。

1. はじめに

日本の中世のキリシタン版には正誤表が付されるものがある。正誤表(errata)¹とは印刷物の誤記・誤植の訂正を示すものであり、管見の限り、日本国内で初めて発行された正誤表はキリ

¹ 当時の正誤表のあり方について規定している文献は見当たらなかったため、そもそも正誤表についての統一的な規範(正しいとされる形)が、この当時存在したかどうかはわからない。唯一正誤表に関する規範として確認でき、かつ広く受け入れられているものとして、*The Chicago manual of style*による「Errata」の規定がある。*The Chicago manual of style*は英語の印刷物における様々なルールを規定したものであり、また初版は1906年であるため、当然これをキリシタン文献に適用させて考えることはできない。しかし、一つの正誤表の形を示すものとして、下記に「Errata」の規定を引用する。なお、以下は第16版(2010)における規定である(時代に合わせて内容が変わっており、例えば1993年の第14版には、「online」や「electronic projects」といった部分は存在しない)。

An errata sheet should never be supplied to correct simple typographical errors (which may be corrected in a later printing, if there is one) or to insert additions to, or revisions of, the printed text (which should wait for a subsequent edition of the book).

It should be used only in extreme cases where errors severe enough to cause misunderstanding are detected too late to connect in the normal way but before the finished book is distributed. If the corrected material can be pasted over the incorrect material, it should be printed on adhesive paper.

A bound-in errata page may be justified when all or part of a book is photographically reproduced from an earlier publication.

It may be placed either at the end of the front matter or at the end of the book and should be listed in the table of contents. Publishers may also choose to post significant errata online; for electronic projects, links to and from any documentation of corrections should be provided.

(正誤表は、(仮に存在した時に、後の版で修正されるかもしれない)単純な印刷上の誤植を訂正するため、もしくは、印刷されたテキストへの追加や改訂するために、決して供給されるべきではない(そういうものについては、次の版を待つべきである)。<正誤表は>誤解を引き起こしかねない重大な誤りが、本が流通する前ではあるものの、通常形で誤りを訂正するには遅すぎるタイミングで見つかったという、極端な場合にのみ使われなければならない。もしも修正後のものを間違った箇所の上から貼りつけることができるのであれば、修正部分を粘着紙に印刷する必要がある。本の全部または一部が前の版から正確に(写真的に、そのまま)複製される場合、装丁された正誤表となるのも止むを得ないかもしれない。その場合、正誤表は、前付けの最後、もしくは本の最後のどちらに配置されてもよいが、目次の項目として記載されるべきである。出版社はまた、重要な正誤表をオンラインに掲載するという形を選択するかもしれない。電子プロジェクトの場合は、元の文書と訂正文書の間のどんなリンクも提供されるべきである。) (訳 引用者)

(1.65 p. 33)

シタン版で用いられたものと思われる²。では、以下に、主要なキリシタン版における正誤表の有無について記す。

表1 主なキリシタン版の資料(ローマ字本)

刊行年	書名	刊行地	正誤表の有無	項目数
1591	サントスの御作業	加津佐	○	172
1592	ドチリナキリシタン	天草	×	
1592	ヒイデスの導師	天草	○	20
1592	天草版平家物語	天草	○	11
1592	伊曾保物語	天草	×	
1593	金句集	天草	×	
1595	羅葡日対訳辞書	天草	○	164
1596	コンテムツスムンヂ	天草	×	
1600	どちりなきりしたん	長崎	×	
1603-04	日葡辞書	長崎	×	
1604-08	日本大文典	長崎	×	
1605	サクラメンタ提要	長崎	×	
1607	スピリツアル修行	長崎	×	

表2 主なキリシタン版の資料(国字本)

刊行年	書名	刊行地	正誤表の有無	項目数
1591	どちりいなきりしたん	加津佐	×	
1592	ぼうちずものさざけやう	天草	×	
1598	落葉集	長崎	○	92
1599	ぎやどぺかどる	長崎	○	21
1600	どちりなきりしたん	長崎	×	
1600	おらしよの翻譯	長崎	×	
1600	朗詠雑筆	長崎	×	
1610	こんてむつすむんち	京都	×	
1611	ひですの経	長崎	○	8
1611	太平記抜書	不明	×	

正誤表はローマ字本・国字本を問わず、必ずしも付されるものではない。また、イエズス会の印刷物の刊行地の変更が正誤表の有無に関わっているとも言い難い。正誤表を付す明確な決

² 中野(1995)によれば、近世の整版本には「正誤表を付載した本そのものの正誤を示したものと、既刊の別本の正誤を付載するものとの二通りがある」(p.256)とあり、享保、万延の例を示している。(pp.256-258)

まりというものはないように思われる³。

このキリシタン版の正誤表について、今野(2014)は、以下のように指摘している。

このキリシタン版の中には、そのテキストの一部として、本文中の誤りの箇所と、その訂正内容を正誤表 (errata) のようなかたちにして添えているものがある。これは印刷過程で気付いた誤りを抜き出したものと思われる(実際にはその誤りが訂正されていたり、いなかたりしており、このことは印刷過程の複雑さを推測させるが、今そうしたことについてはふみこまないことにする)。この「正誤表」は本文作成者が認識した誤りとその「正姿」とを示したものとして興味深い。

そのなかには、例えば「物を」が「を物」となってしまったという類の、いわば「純粹の誤植」もあれば、そこから当時の日本語のありかたをうかがうことができる大変興味深い誤りもある。いや、このテキストの作成者にとってはすべてが「純粹の誤植」であったというべきであろう。(pp.197-198 下線、引用者。)

この指摘にあるように、たしかにキリシタン版の正誤表は、単純な植字上のミスと思われる「純粹な誤植」を多数確認することができる。では、この「純粹な誤植」を正した今野(2014)の指摘する「本文作成者」とは一体どのような人物を想定することができるだろうか。キリシタン版の作成に関わる者として想定できるのは、印刷原稿の作成者、底本の翻訳者、或いは、印刷に関わった版面担当者などの可能性が浮かぶ。本稿では、これを具体的に検討し、誰がどのような意図をもって正誤表を作成したのか。そして、どのように正誤表を作ったのかを検討していく。そのためにキリシタン版各本の正誤表を精査し、このキリシタン版の正誤表の持つ様相を考察していく。

2. キリシタン版の正誤表

キリシタン版の正誤表は、国字本とローマ字本では、構成が異なる。

2.1 正誤表のおかれる位置

まず、各本内における正誤表の置かれる位置を確認する。

³ なお、ドミニコ会のコリヤードの作品、『日西辞書』(1630、マニラ刊)、『日本語文典』(1632、ローマ刊)、『懺悔録』(1632、ローマ刊)にも、正誤表が付されている。ただし、イエズス会資料とは、その体裁が異なる。

表3 正誤表の配置位置⁴

	巻頭		⇔	巻尾
サントスの御作業	本文	目録	正誤表	言葉のやわらげ
ヒイデスの導師	本文	正誤表	目録	言葉のやわらげ
天草版平家物語	本文	目録	正誤表	
羅葡日対訳辞書	本文	正誤表		
落葉集	本文	正誤表		
ぎやどぺかどる	目録	正誤表	本文	集字
ひですの経	目録	本文	正誤表	

これを見る限り、正誤表の配置位置にも明確な決まりがあったわけではないようである。正誤表が付されるか、付されないかが必然ではないように、正誤表をどこに配置するかも、明確な決まりがあるわけではない。

2.2 正誤表の体裁

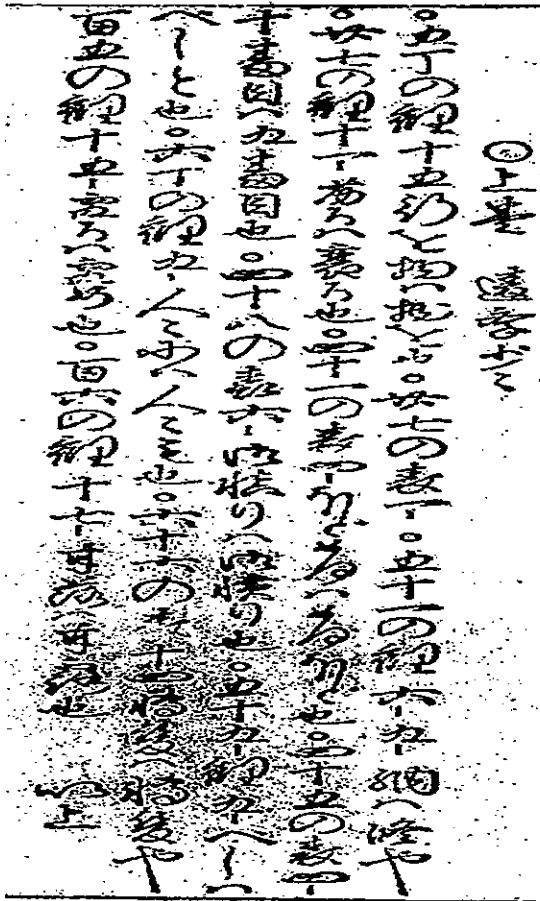
キリシタン版の正誤表はローマ字本と国字本で異なる。以下に示す。

『天草版平家物語』正誤表

FEIQENO CAQIAYAMARI.			
Vomote.	Cudari.	Votdo.	Cacu-yome.
20.	1.	felji.	Feiji.
55.	13.	favonōte.	favānōte.
99.	14.	neguecōzuru.	naguecōzura.
110.	19.	faxerarete.	faxerareta.
112.	13.	Monemuri.	Munemori.
127.	7.	yuqiguetau.	yuqiguetauo.
131.	10.	nagareca.	nagareta.
214.	18.	ata.	atta.
280.	4.	vtarererare.	vtarerafe.
298.	4.	tototemaq.	totemo.
336.	14.	mōxitaus.	mōlaba.

⁴ 『サントスの御作業』は巻1・巻2それぞれに、『落葉集』は本篇・色葉字集・小玉篇それぞれに、『ぎやどぺかどる』は上巻・下巻それぞれに正誤表が付される。順は表3の通りである。

『ぎやどペかどる』上巻正誤表



ローマ字本の正誤表は、上部に「CAQIAYAMARI.」(書き誤り)とあり、その下に、「Vomote.(おもて)・「Cudari.」(くだり)・「Votdo.」(越度)・「Cacu yome.」(かく読め)、といった列が作られる。そして、「Vomote.」は丁数、「Cudari.」は行数、「Votdo.」は誤り箇所、「Cacu yome.」(かく読め)は訂正内容を示す。このような正誤表が『サントスの御作業』『ヒイデスの導師』にも付されている⁵。

一方、国字本の正誤表は、「違字少々」と小見出しを付け、その次行に○を打ち・丁数・表裏・行数・誤り箇所を指摘し、「ハ」の後に訂正内容を示す。

2.3 正誤パターン分類

今野(2014)では、キリシタン版の正誤表の項目について「純粹の誤植」や「正しい言葉使い」をうかがうことができる興味深い誤植といった2種を示したが、本稿ではさらに細かく6パターンに分類した(以下、引用部分の下線は引用者による)。

⁵ ローマ字本におけるこの型は、同時代のラテン文字の正誤表を日本語仕様に改めたものと思われる。同時代のラテン文字の正誤表は、頁・行・誤り箇所・訂正内容を一続きに記すものであり、国字本に見られる「正誤表」の型と等しい。ドミニコ会の資料もこの通りである。

① 純粹の誤植

(1) 『ぎやどべかどる』上巻

正 誤 表：五丁の裡 一五行 を物 ハ 物を 也

実際の本文：5 裏 15 を物

(2) 『サントスの御作業』巻2

正 誤 表：(越度) y_icai (かく読め) y_ucai

実際の本文：308-12 vare y_i cai naqu, (「我 y_i cai なく」)

(1)の例は活字の順序、(2)の例は i と u の違い、といった、「活字の純粹の誤植」によって生じたものである⁶。

② 表現変更

(3) 『ひですの経』

正 誤 表：七十五の裡の二行に、あしでんてにあらんやハあしでんてならんや也

実際の本文：75 裏 2 あしでんてにあらんや

(4) 『天草版平家物語』

正 誤 表：(越度)m_öxitaua (かく読め) m_ösaba

実際の本文：336-14 casanete m_öxitaua (「重ねて申したは」)

これらの例は、前掲の「純粹の誤植」とは異なり、表現の変更を要求するものである。

③ 正しいことば使い(四つがな)

(5) 『サントスの御作業』巻2

正 誤 表：(越度) bigiacu (かく読め) bijacu

実際の本文：204-17 Sate corefodo bigiacu nh_ũnā naru fitobito

(「さてこれほど微弱柔軟なる人々」)

(6) 『サントスの御作業』巻2

正 誤 表：(越度) gi_ũnin (かく読め) j_ũnin

実際の本文：309-9 gi_ũnin uo mexite (「住人をめして」)⁷

ここでの変更は共に gi を j とするものであり、「純粹の誤植」とも言える。しかし、ここで行われているのが単なる変更ではなく四つがなの変更であることに注目したい。クリシタン版では、ダ行の「ヂ」は「gi」、ザ行の「ジ」は「ji」と綴られる。ジョアン・ロドリゲスの『大文典』(1604-1608)では、当時の日本の四つがなの状況について以下のように記す。

⁶ なお、今野(2014)は漢字の運用について「純粹な誤植」とは別に、中国語規範に従った漢字使用も指摘する。ただ、本稿では活字の入れ違いと捉える。

⁷ 『サントスの御作業』巻2の正誤表では、389-9を指示するが、前後を踏まえると、309-9の誤植であると思われる。

OGi(ヂ)の代りに Ii(ジ)と発音し、又反対に Gi(ヂ)と言ふべきところを Ii(ジ)といふのが普通である。(土井忠生訳(1955)『日本大文典』p.608)

このロドリゲスの見解に沿う訂正がなされている。これを今野(2014)では、この正誤表にある指摘が「正しいことば使い」の意識ゆえのものである可能性を示唆する。

発音の区別が失われつつあることがその時期の言語使用者に認識されていたからこそ、発音の区別を保つことが「正しいことば使い」と意識された。この訂正例は、その一例を示すものと考えられるのではないか。(p.220)

本稿でも、この指摘を受け、この四つがな変更の例を「正しいことば使い」に改めたものとし、単に活字を誤ったものとは分ける。

④ 正しいことば使い (アセント符号の変更)

(7) 『サントスの御作業』巻1

正誤表：(越度) v̄came no (かく読め) v̄came yori

実際の本文：40-19 v̄came no fitçuji to nari tamō nari (「狼の羊となり給ふなり」)

(8) 『サントスの御作業』巻1

正誤表：(越度) vom̄o (かく読め) vom̄ô

実際の本文：40-19 caxxen uo xen to vom̄o miguiri ua (「合戦をせんと vomo 砌は」)

正誤表の訂正の指摘は文字だけに限らず、アセント符号も対象となっている。上の例も前掲の四つがなと同じく、オ段長音の開合を正すという点で「正しいことば使い」とし、単に活字を誤ったものとは分ける。

⑤ 文の挿入

(9) 『サントスの御作業』巻2

正誤表：112 suye ni⁸ (cono cudari tarazu) Tera no guiōji no miguiri nari.

Sonotoqi no qiōmon ni Gentio &c.

(このくだりたらず) 寺の行司の砌なり。そのときの経文に Gentio

実際の本文：112-22 no atçumaritaru zaixo uo touoritamō vorifuxi, tera

(の集まりたる在所を通り給ふ折節、寺)

(10) 『サントスの御作業』巻2

正誤表：173-19 izzuremo (to aru tçugui ni core tarazu) miguruxiqi cotodomo nari.

Saruni yotte cocoro uo todomete xiriye no cotouari uo yoqu yoqu qiqe, Martyres tachi ua izzuremo xinmiō uo &c.

(いづれも(とある次にこれ足らず) 見苦しきことどもなり。さるによって心をとどめて後の理をよくよく聞け、Martyres たちはいづれも身命を)

⁸ ここでは Cudari に「suye ni」とあり、行末を意味している。

実際の本文：173-19 *naru coto naru ni, core ua izzure mo xinmiō uo*
 (なることなるに、これはいづれも身命を)

この例は、①~④のように「Votdo」を「Cacu yome」で訂正する形ではなく、「このくだり足らず」や「これ足らず」といった指示に従い後続する文を挿入することを示す。このように単なる文字や表現の訂正ではなく、文の挿入といった大がかりな変更を指示するものも存在する。

⑥ 訂正箇所該当なし

(11) 『サントスの御作業』巻2

正誤表：Vomote 1 Cudari 7 (越度) *qeōquai* (かく読め) *qeōquai*

実際の本文：該当箇所なし

(12) 『サントスの御作業』巻2

正誤表：(越度) *sō* (かく読め) *sô*

実際の本文：179-3 *sōxi tamō* (奏し給ふ)

(11)の例に見られる『サントスの御作業』の巻2の1丁は、ページの記載こそないものの、タイトルの付された丁を指すと見て問題ないであろう。この丁は、「SANCTOS NO GO SAGVIO NO VCHI NVQIGAQI. FIEN NO CVNI TACACVNOGVN IESVS NO COMAPANHIA NOCOLLEgio Cazzusa ni voite Superioresno von yuruxito xite core uo fan to nasu mono nari.Goxuxxe irai 1591.」と記され、正誤表にあった *qeōquai* は存在していない。また、そもそも『サントスの御作業』には *qeōquai* なる語が存在しない。

また、「*sō*」も指摘こそあるものの、本文では、「*sô*」となっており、指摘が当てはまらないものである。

ここまで見てきた正誤表のパターン①~⑥に従って、各文献の正誤表の項目を分類すると、以下ようになる。

表4 正誤表項目のパターン別出現数⁹

	①	②	③	④	⑤	⑥	総数
サントスの御作業	58	77	8	20	5	3	171
ヒイデスの導師	15	1	0	0	0	4	20
天草版平家物語	8	1	0	0	0	2	11
羅葡日対訳辞書	113	27	7	2	9	6	164
落葉集	89	0	0	0	0	3	92
ぎやどぺかどる	20	1	0	0	0	0	21
ひですの経	6	2	0	0	0	0	8

ここからキリシタン版の正誤表は様々な誤植の訂正を行っているが、その大部分は①「純粋な誤植」への処置であるといえる。

⁹ 順は成立年ごと。

3. 正誤表の様相

3.1 誰が作ったのか

正誤表の役割を考えるにあたり、まずは「本文作成者」について考える。豊島(2013)では、キリシタン版の版面担当者が持つ影響力を指摘する。

キリシタン版のローマ字のバリエーションを、ただちに印刷原稿の作成者・底本の翻訳者などに遡らせようとする主張がいくつかある。キリシタン版「平家物語」の綴り字の差の分布から、ローマ字翻字担当者の違いを割り出す事を試みた研究もある。これらは、いずれも、現行の表記がそのまま組版に反映されるものと前提している様であるが、しかし、当時の組版担当者が、印刷原稿にそこまで忠実であったとは思われないのである。

(中略)

これは当時の組版では、著者原稿の一字一字を厳密に活字化する等という態度とは無縁に、版面作成者がそれぞれの持つ綴り規範の下に組版して行った事を如実に示している。

当時は、アカデミーや政府が正書法を制定する事も無く、又、権威ある定本による事実上 (de facto) の正書法なども存在しないので、勢い、綴り字は版面作成者(文選)の責任となる。Hornschurch(1608)を始めとする印刷教科書・マニュアル類の後半が正書法・分綴法(正書法と深い関連がある)教科書の観を呈するのは珍しくないが、これは綴り字の正規化が版面作成者の担当だったからである。(pp.133-134、下線、引用者。)

この論にあるように、「綴り字は版面作成者の責任」とすると、その綴り字の誤りを残したの
は「版面作成者」となる。そして、その誤りを訂正するために正誤表を作成したのも、この責任ある「版面作成者」ではないかという可能性が伺われる¹⁰。今野(2014)は先の引用文における「本文作成者」について印刷原稿の作成者や底本の翻訳者を指すのか、版面担当者を指すのか、言及していないが、当時のキリシタン版の印刷の状況を考えると、この「本文作成者」は版面作成者だったのではないかと考え、以下、考察を重ねる。

3.2 正誤表はいつ、どのように作られたのか

次に正誤表は印刷過程のどのタイミングで作られたのか、実際の資料の中で確認する。これ
を考えるために、そもそも正誤表には扱われていない範囲があることについて指摘する。正誤
表の付されるキリシタン版では、印刷の都合上、正誤表と同じ折で組版されたページの本文に
ついては、正誤表に項目が表れないのである。豊島(2009)、(2013)などで指摘されるように、
キリシタン版の多くは Octavo(八折)で印刷されており、16丁が同時に印刷される¹¹。たとえば
『サントスの御作業』の巻1の正誤表は、287丁からのT折の16丁で構成され、この後半部
に正誤表が付加されている。つまり、287丁から294丁の本文と巻1の正誤表が、同時に印刷
されたと考えられる。同様に、巻2の正誤表は337丁からY折の16丁で構成される。この後

¹⁰ 『サントスの御作業』は翻訳本であるが、その翻訳底本に正誤表があって、それをそのまま採用したという主張は成り立たない。翻訳底本である Luis de Granada: *Introducción del simbolo de la fe*. Vol.2 にも、また「ヒイデスの導師」の翻訳本にあたる同書の vol.5 にも正誤表は存在しない。

¹¹ 豊島(2013)で、「日本語が主体のローマ字本の全て(サントスの御作業、ドチリナキリシタン、平家、イソボ、金句集、ヒイデスの導師、コンテムツスムンヂ、スピリツアル修行)と、欧語著作の改版(ボニファチオ、ロヨラ、バルトロメオ、サー)が Octavo であって」(p.116)とある。

半部に正誤表があり、337丁から340丁の本文と巻2の正誤表も同時に印刷されたと考えられる。この巻1のY折、巻2のY折からは、正誤表に例が抜き出されない。もちろん、偶然指摘した範囲に訂正項目がなかった可能性も考えられる。しかし、もし版の責任を担う版面担当者が刷り上がりに誤りがないかを確認するという作業をしていたと考えれば、この同時に刷り上がった範囲から、誤植を見つけても正誤表に反映させることはできない。『ヒイデスの導師』、『天草版平家物語』も同様である¹²。これを前提に置くと、正誤表はすべての印刷が完了した後に、付けられたものではなく、印刷の過程の中で本文と同時に作成されたのでなかろうか。このことも、正誤表の作成者が版面担当者であったことを強く示唆するものである。

ここから正誤表で示される誤植の大部分が「純粋な誤植」と対応していたのは、正誤表作成者が版面担当者であったからこそ、作成した刷り上がりを自身で確認したためといえる。正誤表で示されたパターン項目の「表現の変更」や「正しいことば使い」といった詳細な検討が必要となる誤植よりも、容易に見いだせる誤植であったからであろう。

3.3 正誤表は修正されない

ここで2節に示した正誤表で指摘があるのにその該当箇所が本文に見られない例について考える。たとえば、『ヒイデスの導師』の正誤表には、以下のようなものがある。

『ヒイデスの導師』正誤表

199. 23. ni ari. nari.

(丁) 199. (行) 23. (越度) ni ari. (かく読め) nari.

このように ni ari を nari へと訂正を促す記載があるが、実際の本文を確認すると、そもそも誤っていない。

『ヒイデスの導師』199-23

majiqi tame nari.

majiqi tame nari.(まじきためなり)

この例は一見そもそも間違いがなかったものを誤認して、正誤表に記したのではないかと捉えられそうである。だが、実はその全く逆の可能性が伺われる。つまり、正誤表が作成された後に、本文を変更した可能性である。『ヒイデスの導師』は現存するものが、ライデン大学図書館所蔵本だけのために、諸本の比較ができないが、諸本比較のできるキリシタン版を確認していくと、この逆の可能性が推定できる。ここで『落葉集』に注目する。

小島(1978)では、『落葉集』の正誤表について、以下のように述べる。

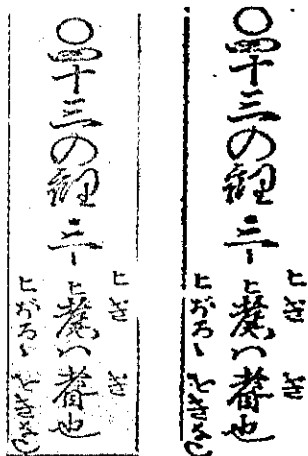
¹² 豊島(2009)では、キリシタン版後期版の『ぎやどペかどる』(1599)の版式から組版者は少なくとも2チームで進行していた可能性を指摘する。さらに、1チームが作業している際、もう1チームが何をしていたか、想像の域を出ないと前置きしながらも、プレス印刷と校正をしていた可能性を示唆する。

「違字」なる正誤表が、本篇、色葉字集、小玉篇の各末尾に付されているが、4本についてそれは同一である。(p.3) 13

さらに、小島(1978)は正誤表で取り上げられた例の訂正状況を各本について調べ、修正されているもの、されていないものがあるなど、諸本間に違いがあることを示した。小島(1978)で示されている例をここで提示しよう。

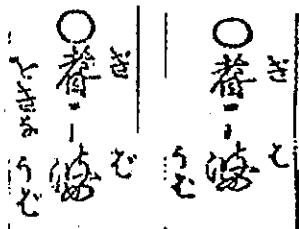
『落葉集』本篇 正誤表

『落葉集』本篇 43裏2



天理本

ローマ本

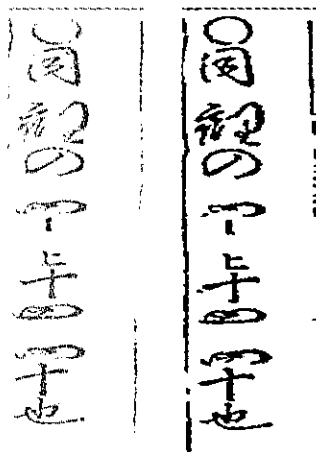


天理本

ローマ本

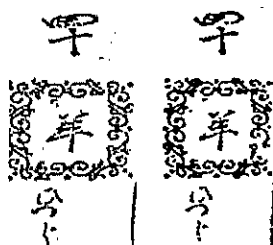
『落葉集』小玉篇 正誤表

『落葉集』小玉篇 8裏4



天理本

ローマ本



天理本

ローマ本

上の例では、双方の正誤表に「四十三の裡」の「三」行目の「耆」を「耆」へ、左傍訓も「ぼる」から「をきな」へと改めることを指示している。しかし、実際の例はすでに修正がされ

13 小島がここで指摘する4本は、ローマのイエズス会本部文書館蔵本、大英図書館蔵本、ライデン大学図書館蔵本、パリ国立図書館蔵本である。本稿では、複製本で用例を確認できるローマのイエズス会文書館蔵本と天理図書館蔵本と比較する。

ている。また、そこにも差があり、天理本は「者」「をきな」と修正しているが、ローマ本は「者」のみ修正し、「をきな」の訓は落としている。また下の例も、双方の正誤表で「十四」を「四十」へと改めることを指示するものの、実際の例では、ともに「四十」と既に修正してある。

ここまでの話で、小島(1978)の指摘のように正誤表は諸本間で同一であるのに、本文には修正の有無に差があることがわかる。ここで考えるべきは、本文は正誤表作成後も修正が加えられているのに対し、正誤表は修正されていない点である。この修正されない正誤表が、本文作成の印刷の過程で同時に作られたものとする、修正の対象は本文のみといえる。このような本文の修正は正誤表がない他の文献でも言える。森田(1993)では、『日葡辞書』の諸本の違いを以下のように指摘する。

パリ本とボードレイ文庫本とを比べると、本篇全体にわたって本文中に小異があり、特に 165 丁表から 168 裏丁に至る間には相違する個所が集中している。それはこの 4 丁がちょうど 1 折分であるから、この部分を印刷した後に、何らかの事情で組版が崩れるか乱れるかしたために、版を締め直したり組み直したりし、その際に改めた所があるのだろう。その相違の大部分は、語の切れ続きを改めたり、大文字と小文字、あるいは、ローマン体とイタリック体の入れ替え、鼻音記号のチル(〜)と n との入れ替え、コンマやピリオドの加除など、印刷形式上の変更にとどまるものであって、それ以外では日本語および葡語の誤植訂正が若干あるに過ぎない。その他の所でも本文そのものの意図的改変と認められるものはほとんどない。(p.3)

この『日葡辞書』での諸本による差は、本稿で確認してきた正誤表の記載事項と似通う部分がある。印刷上の誤植を見つけた際に、版に修正を施すという作業を重ねれば、正誤表は不要なものとなる。これを実践しているのが、正誤表のない『日葡辞書』での修正作業といえる。このように正誤表の有無にかかわらず、キリシタン版で諸本比較できるものを確認すると、本文の修正を確認できるものがある。これは、正誤表が初回印刷時の正誤の提示であり、その後本文に修正を加えることもあったため、正誤表に該当箇所が無い例が存在するのではないだろうか。

3.4 正誤表はすべての誤りを含まない

ここまで正誤表にある例を検討してきたが、キリシタン版には正誤表に記載のない誤植がいくつ也存在する。折井他(2011)にある『ひですの経』の「釈文」で、『ひですの経』では「違字少々」が拾い出していない「誤植」に触れている。

『ひですの経』

87 裏 16 御作を挙で云べし

(折井他(2011)。「原本「で」に誤植」、との指摘有り)

この例は、「御作を挙て云べし」とあるべきが、「御作を挙で云べし」と誤植されているが、正誤表では触れられていない。また、同様の例がローマ字本でも確認できる。

『サントスの御作業』巻1 72-1

mo ni jōjite amacudari tam bexi to notamayeba,

mo ni jōjite amacudari tam bexi to notamayeba,
(もに乗じて 天下り tam ベしとのたまへば)

この文の中間にある「tam」は後ろに「ð」が抜けているものと思われる。このように正誤表に記載がされていない誤植がある。キリシタン版内にあるすべての誤りが正誤表で明示されているわけではない。キリシタン版の中には気づかれる誤植(=正誤表で訂正されている誤植)と気づかれない誤植が存在する。

また、正誤表に指摘のある誤植も、他箇所では誤植の指摘をされていないケースもある。たとえば、先述した(5)の「サントスの御作業」巻2の204-17の bigiacu (微弱)の例だが、『サントスの御作業』内に3例ある bigiacu のうち、324-6の例は正誤表に記載があるが、290-11にある例は、正誤表に記載されていない。キリシタン版の正誤表は作品全体の確認を徹底して踏まえたものではない。ただし、キリシタン版の正誤表が、付加する必然のないもので、付されるにしても初回印刷時に付された、あくまでもオプション的なものであると考えれば、本文内に気づかれない誤植が存在するのもやむを得ないものといえよう。

4. まとめ

本稿では以下のことを確認した。

- ・キリシタン版に付される「正誤表」は版面担当者が作成した可能性が伺われる。
- ・正誤表は該当文献全範囲を対象としたものではなく、印刷の都合上、正誤表と同じ折で組版されたページの本文については対象からはずれている。ここから、キリシタン版の正誤表は本文印刷と同時に作成されたと考えられる。
- ・キリシタン版の本文は、誤植があれば修正することもあるが、正誤表自体は修正しない。
- ・キリシタン版の正誤表は本文内すべてのあやまりを含むものではなく、あくまでも版面担当者が気づいた誤植が記載されたものである。

ただし、残念ながらこの仮説を考察するにはより詳細な原本調査が必要となる。しかし、『ヒイデスの導師』『天草版平家物語』は現存するものが唯一であるために、詳細な比較検討はできない。ただ、残された資料の詳細な調査により、正誤表自体の比較、また諸本間での修正箇所の確認が可能となり、本稿での主張をより補強するものとなりうる。このことで、キリシタン版の版面担当者の日本語に対する規範意識がより明確に捉えられ、当時の彼らの捉えた日本語の姿がより明確となるであろう。今後の課題である。

参考文献

- 折井善果・白井純・豊島正之積文・解説(2011)『ひですの経』八木書店
小島幸枝(1978)『耶蘇会版「落葉集」総索引』笠間書院
今野真二(2014)『日本語の考古学』岩波書店

- 豊島正之(2009)「キリシタン版の文字と版式」『活字印刷の文化史』勉誠出版
豊島正之(2013)「Ⅱ キリシタン版の印刷技術」『キリシタンと出版』八木書店
中野三敏(1995)『書誌学談義 江戸の板本』岩波書店
森田武(1993)『日葡辞書提要』清文堂出版
Geßner, von Christian Friedrich, 1740, Die so nöthing als nützliche Buchdruckkunst und Schriftgiesserey, Leipzig.
University of Chicago Press Staff, 2010, The Chicago Manual of Style, 16th Edition.

使用テキストは各種複製本によった。